

# ケアマネの出会った 家族たち

## 7

### 木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

#### ～ 夫婦 ～

##### 結婚記念日

「こんにちは。今日はいいお天気だね。」と病室に入ってきたのは、田村さんの奥さんです。田村さんは、入院生活7年目。奥さんは、週に2, 3回、電車やバスを乗り継いで2時間以上かけて見舞いにやってきます。9月30日。肌寒い北海道の秋晴れの日でした。

田村さんは、寝たきり状態の体で、話しをすることも食べることもできません。できるのは、わずかに指先を動かすことと、まばたき位です。それでも、いつものように奥さんが病室に入ってくると、奥さんの方に目をむけます。奥さんが上着を脱ぎ手荷物を棚にしまうと何かを催促するようにじっと視線を送っています。

奥さんは、廊下に出て病棟の看護師に挨拶する

と車椅子に乗せて欲しいと頼みます。看護師と介護士が田村さんの元へやってくると、二人がかりでベッドからリクライニングの車いすへ移乗させてくれました。その後、奥さんは寒くないように、膝かけやマフラーを田村さんに巻きました。看護師が「田村さん、いいですね。奥さんが来るのを待っていましたもんね。お散歩行ってきてください。」と言葉をかけます。

「今日はね、実は結婚記念日なの。忘れていたのだけれど、朝、娘が教えてくれてね。思い出したのよ。もう47年。いろいろあったけれど、結婚して47年もたつのだ。」奥さんはちょっと嬉しそうに看護師に話しました。「47年。すごい。あと3年で金婚式ですね。」看護師が言葉をかけると、「そうだね、あと3年頑張ってくれるかな。」とご主人の方を見た。田村さんは表情を変えずに車椅子に座って窓の外を見ていた。

その後、二人は広い病院内を車椅子で散歩し、屋上から見える札幌の景色を眺めた。言葉を発す

ることのできない田村さんの車椅子を押し、屋上では澄み渡る景色を眺めながら、奥さんは、田村さんに話しかけます。そして、持ってきたカセットから田村さんの好きな曲を流し、口ずさみます。入院生活7年目の田村さんご夫婦の今です。それは静かで穏やかな夫婦の時間です。「あと3年。どうかな、それまで一緒にいられるかな」奥さんは黙って景色を眺める田村さんの横顔をみつめた。

## 足跡

田村さんは、入院する前は奥さんとの二人暮らし。週2回のデイケア利用は奥さんのレスパイトが目的でした。当時、咽頭癌の後遺症で嚥下機能が落ちていた田村さんは手術で気管切開をしていました。食事にも時間がかかり、食後の吸引などの処置も奥さんが行います。またパーキンソン病でもあり体の動きが思うようにならない田村さんの動作を一つ一つ介護していたのは奥さんです。それは、65歳近くなった奥さんにとっては疲れる毎日でもあります。60歳で定年退職した田村さんの自宅での介護を5年ほど奥さんが行っていました。時に壮絶でした。

時々訪れる娘たちが、発語不明瞭な田村さんの話に時間をかけて聴いていると、「本人、本人って、世話をしている者の言葉は誰も聴いてくれないの」と叫ぶこともありました。

今のお二人の姿からは想像ができませんが、田村さんご夫婦の歴史は決して楽しい思い出ばかりではないのです。長年の夫婦の葛藤が介護の中にも時には「対立」という形で現れることもありました。

田村さんは、高校の教員でした。そして同じ高校に代替教員としてやってきた奥さんと出会い結婚しました。やがて二人の娘が生まれ奥さんの教員生活も終了しましたが、小さな町では珍しく「バレエ」を子供たちに教えていた奥さんと、田村さ

んは意見のぶつかり合いが多くなりました。時代の先を行く奥さんと、古い考え方を持った田村さんとの戦いです。結婚後の生活を奥さんは語ります。

「あまりにも違い過ぎた。育った環境も、考え方も。考えの違いはとことんぶつかった。若かった勢いもあって、それは激しいぶつかり合いだった。子供が幼い時には離婚も考えたことがあったけれど、子どもが可哀想だという自分の価値観で離婚の選択はできなかった。でも、度々激しくぶつかっては、家を出たり入ったり繰り返しながら、生活は続いてきた。」と。夫婦が激しくぶつかりながらも、田村さんの家庭は続いた。そんな中、思ったより早くに次女が高校の途中から自宅を離れ生活することになったので、夫婦二人になる時期も想像よりは早くに迎えた。そして、次女が家を出た後は、夫婦のぶつかり合いも減っていったと言う。

## 激しさから静かな夫婦の時間

田村さんが、咽頭癌の宣告を受けたのは、50歳の頃だった。それから間もなく、パーキンソン病の診断もついた。まだ、教員をしながら通院が始まったが、パーキンソン病という診断を聞いて、いつかは寝たきりになってしまうのか、という思いも奥さんの中にはあった。けれども、今、ベッドの上で寝たきりで食べることも、話すこともできず、いつも何かを思い、涙を流している、こんな状態になるとはその時は勿論想像はできなかった。少しずつ介護の量が増えていった時にも、夫婦喧嘩もしながら、介護は自分が担うのは当然のことだと思っていた。どんなに激しくぶつかり合った相手でも、病気を前に無力になった状態では手を貸していくしかないと思った。それは昔、祖父母や親の代ではそうやって、老いたり弱ったりしていく家族を家で看たり、看とったりしていた

時代を見ていたからだと奥さんは話します。最期の時を迎えるまで、残った者が看っていた時代の価値観なのでしょう。

今、奥さんが田村さんの元へ見舞いにやってきた時には、田村さんが長年教員生活をしてきた中での思い出話しがされます。田村さんにとっての思い出は、教員時代、生徒や同僚教員との出来事です。古いアルバムを見せると、写真をじっと眺め、その時々エピソードを奥さんが話すと、田村さんの表情はふっと緩み、笑顔になります。夫婦が共有できる楽しかった思い出は、教員とその妻の思い出なのです。

奥さんはこう語ります。たくさんぶつかって戦ってきた相手が病気になってしまった。今、考えると言うべきことを言い合ったから、今は過去に抱いた相手への 憎しみ みたいな感情は一切なくなった。今は、面白かった、楽しかった昔話をして、にこりとした笑顔を見られることが大事だと思っています。

何も言葉を発しない夫に対し、切ないのだろうか、悲しいのだろうか、心の中で泣いているのだろうか、言いたいことが言えないのはどれほど辛いことだろうと胸が苦しくなるというのは、かつて互いの想いをさらけ出しぶつかりあって、わかりあった今があるからでしょう。

今は週に2, 3回2時間以上もかけて見舞いに通う奥さんだが、田村さんが入院して3年程たった頃です。「どんな状態でも、寝たきりでもいいから、一緒にいて欲しかった。一人になるのは嫌だと思う時期があった。」と話します。そう思った頃には病院への見舞いの足も遠のいてしまい、しばらく家で一人きりの時間を過ごしていたそうです。心配してくれたきょうだいが、旅行に誘ってくれました。けれども、「誰かと一緒になければ歩けなくなってしまうのは嫌だ。」と思った奥さんは、このままではダメだと思い一人で外国旅行に出かけました。その事で、気持ちが一転でき、「明るい気

持ちで病院に見舞いに行こう。自分が行けるうちは病院に行って笑顔の時間を作ろう。」そんな風に思えるようになったそうです。

今、田村さんの奥さんは、孫に教えてもらった携帯メールできょうだいや娘とのやりとりができるようになり、声をかけてくれる人の誘いに従って、フォークダンスや歌声サークルへの参加もしています。「私が元気なうちはこんな生き方だと思う。自分自身が元気でいなければ見舞いにも行けない。無理はしないで、できるうちは、今の形を続けていきたいと思う。」と奥さんは話します。

### 「夫婦」時々「両親」

奥さんから夫婦の思い出話を2時間ほど聞きながら、話される内容が夫婦の若いころの戦い(夫婦喧嘩)や、教員をしていた田村さんとそれに協力する奥さんの話が大半をしめていました。お二人には二人の娘がいるのです。娘たちの話はあまり出てきません。

「家族の思い出と言ったらどんなことが浮かびますか。」と質問してみました。すると、少し考えながら奥さんは話しました。

家族の思い出。それは、車の免許を遅くにとった田村さんが、車を購入してから、道内の温泉巡りに行ったこと。二人の娘が、その時々大きな問題にぶつかった時には、例え夫婦が冷戦状態に陥っていた時にも、休戦し娘のために力を合わせたこと、そんな思い出が家族の思い出としてあっさりと言られるのです。あまりにも、家族全体の思い出の薄さに、夫婦の壮絶バトルは娘たちにはどう映っていたのだろうか投げかけてみました。

「子供たちは、あんな家庭では嫌だったと思うけれど、今はどうしようもないし。子供には嫌な思いをさせてしまったけれど、生きるって大変な事で、それをありのままに見せてしまっていたと思う。憎しみをぶつけ合ったこともあったけれど、

今は全くその感情はないし、面白い人生だったと  
感じています。」

「夫婦」とは何か、奥さんは話します。「自分の  
考えを話し合い、ぶつかってもいいから納得する  
まで話をし、十分納得できたら、最期まで共に  
歩いていく。話合いを徹底的にできたからこれま  
で一緒にいられたし、自分の人生には納得してい  
ます。それが「夫婦」ということかな。」と。

田村さん夫婦は、結婚して子どもが生まれても、  
「夫婦」という関係はずっと続いていて、そんな  
二人に、娘たちが時々体を張って何かの行動を起  
こしていたのだと思います。娘たちが何か問題を  
発信した時、「夫婦」の関係を休戦し「親」として  
共に力を合わせたのでしょう。配分としては「夫  
婦時々親」だったような気がします。

### ケアマネの卵として初めて出会った夫婦

田村さんは、私が介護支援専門員実務講習受講  
試験に合格し、実務講習の際に、介護認定調査や  
アセスメント、ケアプラン作成の演習のためのモ  
デルとしてお願いし協力してもらいました。当  
時の田村さんは、少しずつ弱って体の自由も奪わ  
れていく状態の中でした。かすれた声と筆談で会  
話をしました。これから、ケアマネジャーになる  
私には「利用者の話を、最後までゆっくり聴いて  
やりなさい。はやとちりして解釈しないように、  
話しが終わるまでしっかり聴くこと。」と言いま  
した。その言葉は今でも私の心に残っています。

奥さんに今回の「夫婦」をテーマにインタビュ  
ーした時には、実に多弁に語る夫婦の思い出と比  
べ、娘たちの話題の少なさに寂しさを感じました。  
話を聞きながら、「そうか、ずっと夫婦だったんだ。  
親ではなく夫婦として歩んできた二人だったん  
だ。」と感じました。

話を聞きながら、語られる思い出の中に自分た  
ちが登場しないことに、幼かった頃、抱いていた

気持ちがもう一度蘇りました。「私は寂しかったよ。  
仲のよい両親の下で育ちたかったよ。ずっと寂し  
かったよ。」

田村さんと奥さんは、私の両親です。それでも、  
私の言葉に「でも、仕方なかったよ。」という母。  
そして、改めて、母と私は長いこと、がちゃがち  
やしていた当時の家庭を思い起こしました。私の  
記憶には、父と母はいつも戦争だった。一度だけ、  
私の給食のメニューが、パンとお汁粉とハムだっ  
たという話を私が寝ている枕もとで二人が話して  
いて、「学校はずい分おかしなメニューを出すもの  
だ」と笑っている会話を記憶している。幼い私が  
記憶している両親の笑い声はそれだけだ。

今、父には言葉も、体を動かす自由はない。そ  
の代わりに、夫婦には穏やかな時間がある。

「あんなに、激しい人生を歩んだ二人が今は嘘  
のような穏やかな時間を過ごせて、二人は幸せだ  
ね。」とやや皮肉めいて母に言ってみた。すると、  
間髪を入れず、「うん。幸せだったね。」とあっけ  
らかんとした母の一言。

笑った。そして、今、この原稿を書きながら私  
は大切なことを思い出した。私はその生い立ちゆ  
えに苦しい思いをたくさんしてきた。今でも、悲  
しさや寂しさを手放せずにいる内なる子供を抱え  
ている。けれど、幼かった私の願いはただ一つ。  
「両親に仲良くしてもらいたい。」今、あの頃の私  
の願いは叶っているのだ。

寝たきりになってしまった父の残された時間が、  
夫婦にとって穏やかで楽しくありますように、今、  
娘として願っています。

ケアマネの卵として初めて出会った、田村さん  
ご夫婦の物語でした。